江戸の笑い

小ばなし歳時記

加太こうじ

江戸の笑い

小ばなし歳時記

加太こうじ

立風書房

江戸の笑い　小ばなし歳時記

1970年12月20日　第1刷発行

著　者　加太こうじ
発行者　下野　博
発行所　立風書房
東京都大田区南千束1の12の4
東京（727）1101～8
振替　東京74493　〒145
印　刷　壮光舎印刷株式会社
株式会社　美術版画社
定価　420円
落丁・乱丁本はお取替えいたします
0076—12141—8909

まえがき

江戸小咄といわれるものには、江戸でできたものと、関西でできたものがある。それゆえ江戸時代の小咄というわけで、江戸にかぎったものではない。

落語には小咄に尾ひれをつけて長くした話が多い。その点、江戸小咄は落語の原型だともいえる。

落語が世態風俗の描写を中心としたこっけいとすれば、江戸小咄のほうは、その笑いの部分だけをとりだしたようなもので、単的な笑いの錠剤であり、江戸時代の笑いのエッセンスだといえよう。

この本は、たくさんの江戸小咄のなかから、今日でも通じる咄をとりだして紹介するとともに、江戸小咄ができたころの人びとの生活や考え、あるいは地理的な条件などを書きそえて、笑いながら江戸時代を知っていただけるように配慮して書いた。

また、江戸小咄成立の歴史的なことがらにもふれてある。さらには、江戸小咄から発生した落

語にもふれている。

おことわりしておくが、当時の小咄本に記載された文章を、そのままのせたのでは、たくさんの註釈をつけなければならないこともあるので、できるだけ、すらすらと読めるように、現代風に書き直した。それゆえ、小咄の研究本ではなくて、小咄入門の本になっている。

気のきいた小咄をおぼえて、酒席の興とされるのもよかろうし、フランス小咄などと比較して、日本の小咄を味わっていただいてもよい。江戸小咄に関する本は多い。小咄を収集して原文に忠実な態度で小咄だけを記載してあるもの、現代風に書き改めたもの、研究本、江戸趣味による小咄本、さらには辞典まである。この本は、軽い気持で読めるが、読み捨てにはできないというところを、ねらって書いたつもりである。座右の書とはいかないだろうが、読後、本箱のすみにでも入れておいて、だれかに貸してやる本として扱っていただければ欣快である。

秋晴れの日に　　加太こうじ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

江戸の笑い　小ばなし歳時記　目次

まえがき 1
四季と小ばなし
浅草と吉原 一月 8
雪見酒 二月 16
桜風呂 三月 23
春はのどかにして哀れ 四月 32
節句―惚れ薬―彼岸 五月 39
初夏のあれこれ 六月 46
お盆と丑の日 七月 53
月見 八月 60
小町と業平 九月 67
大名屋敷 十月 75
うなぎと蕎麦 十一月 88
大晦日 十二月 101
人物歳時記 114
そこつ長屋

浮世床をもとめて 167
坊　主 161
子どもたち 155
江戸のいなか者 145
泥棒と間男 135
義　理 123

小ばなしの旅
旅―五十三次 203
京・大阪 194
川と橋 184
外　国 174

小ばなし考
小ばなしの成立 232
現代と小ばなし 221
小ばなしと宮尾しげお 214

装幀・玉井ヒロテル

四季と小ばなし

一月

何はなくともお正月、まずはめでたい。

男の子はたこあげ、こままわし、女の子は追い羽根で裏長屋にも一陽来福、昨日の鬼＝大晦日の借金取りが、おめでとうございますと礼にくる。

魚河岸の初売が二日、職人もこの日を仕事はじめにした。昔の働く人は正月は一日だけしか休まない、勤勉なものである。初荷、初夢、武士の乗馬初めと初ずくめの二日のうちで、一番威勢がいいのが町火消の出初め、各町の鳶頭が革羽織、腹掛け、半てんも新しく、いろは四十八組ずらりとそろう華やかさ、男をきそうはしご乗り。

鳥追い、獅子舞い、万歳とお江戸の春のにぎやかさ。ついうかうかと七草がきて、ようやく門松を取り払う。十一日が蔵びらき。小正月が十五日。十六日はでっち小僧の藪入りの日。お正月気分は、ここらあたりでおしまい。あとはまた、かせぐに追いつく貧乏なしとそれぞれが家業にせいをだす日常になる。

門松はめいどの旅の一里塚というが、こんな正月をあと何日くりかえすのかと、ひょいと考えて、貧乏ぐらしがいやになる夜ふけ。火の用心さっしゃりましょう——。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

浅草と吉原

高速道路が往き交い、ビルがどんどん増える。鋭角なムードとスピーディーな近代精神に色どられてしまった東京のなかにも、古き良き時代を偲ばせる点と線と色は、まったくうしなわれてしまったわけではない。

浅草といえば観音さま、吉原といえば遊廓……また〈三社さま〉の人波もなくならない。まして三百年の歴史を生んだ庶民の哀歓をうたう〈ヨシワラ〉の色は褪せない。

ある男、浅草の観音さまにねがって、「なにとぞ金銀をあたえたまえ」という。観音あわれに思いて金銀をたまわる。男、あまりのうれしさに押しいただいて、ひたいを金銀につければ、こはいかに、金と銀がひたいについてはなれぬ。男、こまっているところへ、連れの将棋好きの男がきて、「どうし　。ふーん、ひたいに金と銀がくっついてとれねえ、それなら鼻のあたまへ桂馬を打て」

この小咄は元文年間のものだから、ざっと二百三十年ほど昔にできたわけだ。その頃から浅草の観世音菩薩は霊験あらたかとされて、参拝するものが絶えなかった。

特に、元旦の朝の初詣はたいへんな賑わいだが、気の早い連中は大晦日の夜から浅草へいって、除夜の鐘をつきだす時刻には、お堂の前で待っている。もっとも、これは昔だけではない。現代でも初詣一番乗りを目ざして待っている人は多い。やがて、弁天山の鐘が鳴る。お堂の扉がひらく。さっとなかへかけこんで、お賽銭を投げておがむ。ついでに何か落ちていたら拾ってくるというのはよくないが、とにかく賑やかなものである。

だんなが、いなかからきた飯炊きの権助をつれて浅草の観音さまへ参詣にきた。「これ権助、なんと賑やかであろうが、お前のいなかにこんなところはあるまい」「はい、さようでございます。だんなさま、えらい人ごみでございますから、何か落さないようにお気を付けなされまし」「うん、おれは落さぬ、したが、お前にあずけたゼニはどうした」「はい、とっくに落しました」

浅草の観音さまは本当は金竜山浅草寺といって、奈良朝時代から知られた古刹だ。まつってあるのは一寸八分の黄金の観世音菩薩像である。これは隅田川で漁をしていた漁師がひろったのだ

が、ときに推古天皇三十六年というから千三百四十年も昔のことである。

ひろってまつった三人の漁師は、観音堂の横に浅草神社のご神体としてまつられている。三人一緒だから俗にこの神社を三社さまとよんでいる。

浅草が観音さまを中心に、本当に繁昌しだしたのは、江戸が日本一の大都会になってまもない三代将軍家光のころからである。雷門（かみなりもん）があって仁王門があってその向こうに本堂ができたわけだが、いまの本堂は江戸時代以来のものが昭和二十年三月十日の空襲で燃えて、つい六、七年前に完成した鉄筋コンクリートの近代建築だが、形は昔の本堂にそっくりだ。

観音さま自体は笑い話のタネになりにくいが、観音堂の前にいる仁王さまは、大きい図体で一寸八分（六センチ）ほどの観音さまの門番をしているから、江戸小咄の材料にもたびたび使われている。

泥棒が夜中にこっそりきて、観音さまのお賽銭を盗んだ。箱へ入れて背負って仁王門をでようとすると、仁王が見つけてむんずとつかまえて、ねじ伏せて大きい足でふむ。「うぬは何やつだ」泥棒はふまれたはずみに一発プウ、仁王鼻をつまんで「くせえやつだ」泥棒「仁王（臭う）か」

仁王はからだつきが立派だ。健康そのものである。そこで、紙を噛んで仁王のからだへぶつけて祈ると、紙が当たったところが丈夫になるといわれている。

ある夫婦者が仁王門の前へきた。亭主が紙を噛んで投げると仁王のヘソのあたりに当たった。女房がそっと亭主にいう「もすこし下のほうがよい」

吉原の女郎が仁王という力士を客にとったというので評判になった。「おぬしは仁王を客にとったというが、さぞ大きかったろう」「なあに、このくらいだよ」と指で大きさを示す「そんなことはあるまい、あの大きい仁王のからだだ」「なあに、仁王さまの手でこれくらい」

浅草の裏手北側に吉原の遊廓があった。古今亭志ん生にいわせると「地番改正でどう地名が変ろうと、赤線廃止で女郎がいなくなろうと、東京落語のなかには、吉原はちゃんと残ってまさあ」という。江戸から東京へかけて三百年の歴史とともにある吉原だ。本名は新吉原だが、これは三百五十年ほど前に当時の盛り場の両国橋の近くに遊廓があったのを、明暦の大火ののちに幕府が浅草の北側の田圃(たんぼ)のなかへ移転させた。それゆえ新吉原というのである。遊女の数およそ三

千、不夜城といわれて江戸一の歓楽境だった。

浪花節の『紺屋高尾』や、講談の『仙台高尾』で知られているが、松の位といわれる才色兼備の遊女がいた。《遊子浪の上におん帰らせ、お館の首尾いかがにて候や、忘れねばこそ思いいださず候かしこ、ぬしはいま駒形あたりほととぎす》とは、高尾太夫が仙台の殿さまに贈ったラブレターだというが、講釈師のいうことだからアテにはならない。

落語にも『高尾』という雑談がある。また『強飯の女郎買い』『明烏』『付馬』『山崎屋』その他の話があり、落語家は吉原を人生勉強のところとして吉原学校といっていた。

吉原は浅草の北側にあるから俗に北、あるいは北国といったが、その吉原の北側には日本堤―吉原土手がある。本名の日本堤とは、吉原遊廓の建設に当たって、ときの将軍が全国の大名から人足をださせたので、日本中の力がより合ってできたから日本堤とつけたのだそうである。土手に面して大門がある。いまも戦災焼け残りの大門がわびしげに残り、その脇に何代目かの戦後の見返り柳が都塵をあびてしょんぼりと立っている。吉原土手は略しては土手といった。

「土手までいくらでやる」「二百文ください」「よし、早くのせろ」と駕籠に乗り「急いでくれ」「急ぐのなら三枚が早いが」「三枚とはなんだ」「三人で駕籠をかつぐことでございます」「三人なら早いか」「はい、早ようございます」「よし、それなら、おれもで

てかつごう」

土手で逢うていまはや何をかくすべき――という古い川柳がある。普段は近所でしかつめらしい顔をしていた男同士が、吉原へいく道でばったり出会った。お互いに悪所がよいだから気どる必要はなくなったわけだ。

吉原には全国から貧しい家の娘が売られてきた。そこで各国のなまりで話したのでは通じないから、独特の吉原言葉を作って使わせた。ありんす、くんなまし、のいわゆる里言葉である。遊女のなかには海千山千の古つわものもいたが、子どものうちに買われてきて、ここで育った世間知らずもいた。

となり座敷で「もうかんにんなりんせん。あんまりでありんす」という声がしたので、居つづけの客がのぞいてみると、おいらんが鏡に向かって自分の胸ぐらをとって、ひとりごとをいっている。「これ、なにを昼間からしているのじゃ」と声をかけると「あれ、見ていなんしたか、これは必ず人にいってくんなんすな。嘘のつき方をくふうしておりんす」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.